



〒028-5133

岩手県二戸郡一戸町中山字軽井沢 49-33

電話:0195-35-2231

FAX:0195-35-2781

〈三愛学舎ホームページ <http://www.sanaigakusha.net>〉

三愛学舎広報誌の発行にあたり

三愛学舎は、約40年間、地域の方、先輩方、たくさんの方々に支えられてきました。これまで支えていただいた方々に感謝を伝えるとともに、三愛学舎の活動を多くの方々に知ってもらうことを目的に、広報誌を発行することとなりました。

第1号の発行にあたって、8代校長(2003~2008年度)の北村嘉勝氏、9代校長(2009~2014年度)の澤谷常清氏、現PTA会長の丸田博氏、現校長(2015年度~)の伊藤和彦氏に、「三愛学舎に対する思いや望むこと」をテーマに寄稿いただきました。タイトルの『三愛学舎』の文字は、初代校長(1978~1986年度)の中津徳平氏が作成した看板文字を引用しました。

今後、年1回の発行をめざし、親しみやすく興味をもって読んでもらえるものにしていきたいと考えています。

(副校長 岩崎崇)



(初代校長 中津徳平氏)



現在、三愛学舎創立40周年に向け看板を作成しています。「未来に受け継いでいくもの」のひとつとして、初代校長である中津徳平先生の書いた看板の文字をトレースしました。

「Yes！」への希望に生かされる群れ

きたむら よしかつ
北村 嘉勝 (8代目校長)



奥中山学園(児童施設)開園の二年目 1974年、私設の高等部が開設され、中には義務教育の免除や猶予の方々もおりました。活動が始まると、厳冬を耐えた芽吹きのような輝きに何度も目を見張りました。日々解放される彼らに導かれ、1978年、生徒11名で三愛学舎が開校し、以来約40年です。今、第一期生の半数以上が事故や病気で亡くなっています。彼らの生涯で三愛学舎はどのような体験だったのか?と考えます。

かつて今も、社会からは就労・自立と「より巧みに生きる」ことを求められ、教育はそれに呼応する一面があります。しかし私は、行倒れで凍死した第一期生の末路から、安定して「より巧みに生きる」には「より良く生きる」という土台が要る、と気づかされました。自分の存在に「Yes！」と承認を与え、隣人にも「Yes！」と言える心の土台です。

第一期生の時代とは異なり、子育てや教育の環境は豊かになりました。とは言っても、幼少期から「より巧みに生きる」働きかけを受けながらも、「自分はいない方がよいのではないか?」「自分はNo！」などと否定的に受け止める子どもが少なくありません。

三愛学舎入学から専攻科卒業までの期間は思春期の終りに当り、子ども時代を総括する時期です。この成人への過渡期には親以外の第三者との出会いが重要です。過去の「No！」の体験がどれほど過酷であっても、過去は誰かに共感されることによって価値あるものに変化します。過去体験に共感され受け止められて、「自分はYes！」と芽吹き、自ら枝葉を伸ばす力を得ていきます。三愛学舎の五年間は、「No！」から「Yes！」へと向き直り、その先、人生の嵐に遭っても、「それでもYes！」と肯定できる心の土台を据える時、やがて確かに芽を出す種が蒔かれる時、と言えるでしょう。

しかし、「それでもYes！」とはなかなか言い切れません。だからこそ毎日、生徒も教師も『三愛…神を愛し・人を愛し・土を愛す』によって「あなたはYes！」と力づけられ、共に励むのではないのでしょうか。

『三愛』に結ばれている私たちは、たとえ離れていても、「より良く生きる」道を求め、「No！」から「Yes！」への希望に生かされている群れにちがいません。

「三愛学舎の青年期教育を思う」

さわや つねきよ
澤谷 常清 (9代目校長)

◆三愛学舎ができるまでの概略

「ちえおくれの障害をもった人々の幸せを共に考えていこう」「心身に障害を持っている人々が、何の偏見も差別も受けないで、胸を張って生きていける地域社会をつくるろう」という叫び声からカナンの園が生まれました。

カナンの園は、「知的障がい児の父」と言われた糸賀一雄の言う、「この子らに世の光を」ではなく、「この子らを世の光に」という子どもを中心として考える福祉の第一歩を踏み出したのでした。

奥中山学園ができ、子供たちが学園生活を送っていく中で、「この子たちにも高等部の教育を受けさせたい」というねがいから、中学校を卒業した後の青年期教育の場として、三愛学舎（旧養護学校）がうまれました。公立の養護学校が義務化される1年前の1978年（昭和53年）でした。

教育の柱として、三愛精神（神・人・土を愛す）を掲げてきました。そのなかでも人を愛する教育は、人間の真のつながりを追求し、生徒、教師が共に学び、人間の真のつながりを大切にする「場」としてとらえ、「…人間が共に生き、生かし合える社会のあり方を考え、探し求めていく」ことをねらいとしました。

その後、「生活」「労働」を大切にして取り組んできました。しかし、高等部の3年間では卒業後の進路がいつも頭の中にあり、どうにかして働く人にさせようとする教育の内容が大きな位置を占めざるを得ませんでした。「挨拶」「返事」「報告」等、基本的な生活習慣、また社会的なルールの学習は、働く上で必要な事柄でした。その結果、一般企業に就労する者も多く出ました（一般就職率34%）。しかし、1年も経たないうちに無断で職場を休む回数が多くなり離職するケース、職場でのトラブルが原因で会社に行けなくなったケース、情緒面で不安定になり就労が困難になったケース、働くことに意欲をもてず退職する者も出てきました（創設から17年間での離職率76.5%）。離職は誰にでもあり得ることですが、離職後、落ち込んで家に引きこもる者も出てきました。知的ハンディのある子どもたちにとって18歳で社会に出ることはハードルが高かったのかもしれません。自分と向き合うことができないまま、また、自分で物事を決める力を身につけいまま卒業させてしまったのではないかと反省させられました。



◆青年期は大切な時期

青年期は「からだ」も、「こころ」も大きく変化する時期です。難しい言葉で言えば、内省的な傾向、自我意識の高まりに加え、社会的意識も高まってくる時期です。

子どもから大人への過渡期であり、「いつまでも子どもではない、大人である」という意識をもつ時期でもあります。したがって、生活年齢(暦年齢)にふさわしい関わりが大切です。

また、人生の中で最も躍動的な時期かも知れません。人が人として成長するために何が大切かをわきまえる力が準備される時期でもあると思います。

知的障がいのある子どもたちは、からだの成熟に心の発達がついていけない場合が多いと思います。ゆっくり、じっくり一人一人に応じた教育的支援が必要です。自我意識や社会的意識への高まりを保障するためには、少しでも長い学びの時間が必要です。

◆専攻科の必要性

専攻科は、ゆっくり、じっくり一人一人の発達を確かめながら、自信をもって社会に臨んでいけるような力をつけることをねがいに、教育年限を延長して、高等部3年間を終えた後にさらに2年間の専攻科を設けたのが、創設17年後の1996年でした。「自分さがし」「自分づくり」の時間を少しでも長く保障しようというのです。

専攻科を卒業して意欲的に社会生活を送っている先輩たちからメッセージをいただきました。

- ・本科だけ卒業しているので、5年間自分のためになる勉強をしたかった。職場実習だけが学校の教え方ではないような気がする。自分の行いの見直しが足りなかったと思う。
- ・療育手帳とか障害年金は嫌いです。私の心は障がいの言葉は消えない。今は自分が障がいではなく、特性を持っている人というかたちで自分の心が切り開けるまでに強くなった。世の中、障がい者と呼ぶのではなく、特性のある人という見方になる世の中になってほしい。

<専攻科は必要か?の質問に対して>

- ・働く力を身につけるのは3年では難しい人が多い。
- ・生活する力をつけてその体験をする。余暇活動もして自分の趣味を見つける時間がある。
- ・18歳までは分からないことが多い。二十歳の大人になってから社会に出ると安心。
- ・本科で話をしなかったことも専攻科なら先生と話が出来ることがある。
- ・専攻科は友達を作る力がついてくる。
- ・大学生のようにもっと勉強をしたいから。
- ・本科の3年間は忙しい職場実習におわれて、あまり学校にいたという実感がありません。だから、あと2年あれば満足して学校生活を送れると思う。



- ・自分のことをもっと分かるようにいろいろな人と話をしたり、教えてもらって、社会に出ても恐くないと分かるようにして欲しい。(自分の特性とか、なぜ障がいがあるのか、何を障がいとよぶのか等)
- ・専門学校のような勉強もしたい。
- ・自分のこと、社会のこと、ギモンに思ったことを先生も生徒も腹一杯しゃべれるような雰囲気、仲間がいてほしい。仲間がいるのが専攻科だから。
- ・専攻科は「自分を知る」(障がいのこと、障がいをもっていること) 勉強をもっとした方がよい。話し合いの機会をつくる。

先輩たちは専攻科を見学し、生徒の学習意欲が大切にされていることを確認し、「専攻科は必要だ」と言い切るのです。

学習意欲は自己肯定感を生み出し、さらに「労働意欲」に結びつき、「生活意欲」に結びつくことを確認することができます。専攻科では教育活動全般を通して、自己の内面の成長を育み、自己肯定感を育むのです。

専攻科は、単なる学習年限の延長ではないし、一般就労のための職業訓練の場でもありません。青年期における人間の発達を保障し、人間形成を育む場です。

人が人として生きていくための大切な条件の一つが、「学ぼうとする意欲」をもつことです。青年期教育の場で培われた自主性、主体性が具体的な形を経て内面の成長を育み、社会生活での学習意欲に結びつき生涯学習につながるのです。

豊かな青年期教育をうけた青年たちが、社会の一員として自分に誇りをもち、胸をはって生きてほしいとねがうのです。



「生徒がゆっくり成長できる大事な場所」

まるた ひろし
丸田 博 (三愛学舎 PTA 会長)



私が三愛学舎に初めて行ったのは、専攻科 2 年生の息子が小学校に上がる前のカナン祭でした。当時の息子は、多動が激しく一時も目が離せない状態でした。息子と同じ障がいを持った生徒が、生き生きと発表する様子を見て、自分の息子もこんな風になれるのかなと思ったものでした。支援学校の中学部を卒業後、希望通り三愛学舎に合格でき、入学式ではようやくこの学校にたどり着いたなと感慨深く参加しました。

学校生活は、新しい仲間や先生との関係が上手く行くまでは時間もかかりましたが、作業や調理もこなせるようになり、少しずつ成長していることが感じられ親として嬉しかったです。本人が楽しく学生生活を送れているのを感じることができ、三愛学舎に入れて間違いはなかったと思っています。本科・専攻科合わせて 5 年間という時間は、入学前にはとても長い時間のように考えていましたが、もうすぐ卒業時期になると思うとあっという間のようです。短く感じられるのは本人もそうでしょうが、保護者としても充実した時間をすごしたので短く感じるのだと思います。

三愛学舎は小さな学校ですが、生徒がゆっくり成長できる大事な場所だと私は思っています。生徒一人一人は、違った小学校・中学校での生活を経て三愛学舎に入学して来ました。

多くの生徒が困難を伴った学生生活を送ってきた人たちです。本科・専攻科の 5 年間を経て自身の障がいと向き合い、周りの人たちとの関係を築くことが出来るようになるには、16 歳から 20 歳の多感な時期に継続した仲間との関係や師弟関係が人格を作り上げてくれると思います。三愛学舎の三愛精神と 5 年間の継続した教育が、他の支援学校との違いであり保護者が本校を選ぶ価値があるのだと思います。ゆっくりと人間形成に時間を掛けて下さる先生方の教育方針をこれからも続けてもらいたいです。



「共に学び合うということ」

いとう かずひこ
伊藤 和彦 (現校長)

卒業生から、『今の仕事に就いて、大変なこともたくさんあったけど、職場の上司が、一つ責任を任せてくれたことが嬉しかった。』と電話がありました。卒業後二つ目の職場で働いています。

彼は、進路指導を担当していた頃、卒業までに就職先を決めることができなかった卒業生です。入学当初から本人、保護者とも卒業後は一般事業所への就職を希望し、専攻科でも職場実習をくり返しました。仕事への取り組みも真面目で、様々な職種にも適応できるのではないかと思っていた生徒でしたので、正直なところ、就職もあまり苦労せずに決められるだろうと思っていました。就職を前提に実習を重ねていた事業所は、担当の方も熱心に彼に職業人として必要な心構えを厳しく教え、しっかりと仕事が出来たときには、満面の笑顔で褒めてくださいました。いつか是非卒業生を育てていただきたいと心から願っていた事業所でした。彼も高い評価を頂きましたので、進路面談で保護者の了解をもらい、雇用のお願いへと進みました。しかし、肝心の本人の決心がつかず、結局、卒業時点での就職は決まりませんでした。周囲が定めた生活と、彼が望む生活が重ならず、言葉でうまく表現できずに葛藤したのだと思いますが、今思えば、彼の心の中にはすでに“働く自分”というイメージがしっかりと出来つつあったのだと、その後の彼との付き合いから、ようやく私にも理解することが出来ました。生徒の本心を汲み取ることの難しさを教えられ、それでも最後まで自分を頼ってくれたことを本当に嬉しく思いました。何にも代え難いこの仕事の有り難さです。

『あなたがたの新田を耕せ。』これは、入職した頃、恩師に贈られた旧約聖書の言葉です。最初は文字通り、山野を切り開き、土を耕し、新しく田畑とすること、新しい環境の中、自らの可能性を拡げなさいという励ましの言葉を頂いたと単純に思っていますが、加えてそこには、実りを刈り入れるために、種を蒔き、命を育てるという大切な意味が込められているのだと、その後教えていただきました。互いに良い実を結ぶことができるよう学び合う、これからもそんな学び舎でありたいと願っています。



<今後の主な行事>

1月21日（土）	成人を祝う会
1月27日（金）	2017年度入学選考日 （在校生徒休業日）
2月 3日（金）	2017年度入学選考合格発表
2月 3日（金） ～5日（日）	第19回三愛学舎卒業展
3月 3日（金）	卒業生を送る会
3月11日（土）	2016年度卒業式

ホームページのお知らせ

本校では、ホームページを開設しています。

また、同ホームページ内にて「さんあい日記」というブログも更新しています。生徒達の直筆のコメントや活動の写真等を記事に掲載しており、活き活きとした学校生活の様子をより間近に観ることができますので、ぜひご覧ください。

なお、ブログは毎週金曜日に随時更新しています。ホームページには以下の URL よりアクセスしてください。

☆三愛学舎ホームページ☆

URL:<http://www.sanaigakusha.net>



編集委員のつぶやき

体調を崩し、長くお休みを頂いて復帰した日の昼食に、『白和え』が出ました。三愛学舎本科では毎日の調理実習でクラスの昼食を作っています。私はそれまで、体調不良でご飯があまり食べられない状況が続いていましたので、その日の昼食を食べきれぬか心配でした。しかし、ひとくち「白和え」を食べたとき、体中にしみわたるおいしさと、体だけでなく心まで元気がでるような感じがして、とても力を頂きました。

「共に食べることは、共に生きること」以前、ラジオで誰かが言っていました。私も、生徒の作る食事に支えられそして、一緒に食べることでまた、生徒と共に生きているのだと改めて思いました。

作った生徒に「作り方を教えて欲しいな」と言うと、「内緒っ!」と笑顔でかわされました。心にしみる『白和えレシピ』は簡単には教えてもらえないようです。

高橋